

平成23年「済生」10月号に掲載されました。

特集

看護職新時代

―日々の仕事の中で模索する次代の看護師像

増大する業務と不足する人員。看護職を取り巻く環境は厳しくなる一方ですが、それは医療・福祉現場での看護職への期待の大き目の表れでもあります。さらには日々の多忙な業務の中で、次代の「看護師像」も模索しなければなりません。現場での取り組みを紹介します。

看護に家庭看護という言葉があるように、古来より看護は人間の生活と深く密着してきました。看護の歴史は100年にわたり今日までに体系的にまとめられ看護学が構築されました。日本は急速に少子高齢化が進み医療を受ける側の多様なニーズの高まり、医療の高度化などにより、看護は高度に専門分化してきました。平成2年の「看護師等の人材確保の促進に関する法律」の制定は、その目的を「看護師等の養成、処遇の改善、資質の向上、就業の促進を図り、高度な専門知識と技術を有する看護師等を確保することによって国民の保健医

療の向上に資する」としている。そして、看護の専門性の高まりは、平成8年の認定看護師制度に始まり、今年7月には、専門看護師、認定看護師、認定看護管理者の3資格の認定者総数が1万人を超えた。また、高度な技術を持った(仮称)特定看護師の養成が進んでいる。当病院の看護も新しい時代へと流れる渦中にあるといえる。このような激動の時代において看護管理者が今までとは違う気づきと改革するための決断する勇気を持つことの必要性を痛感する。

看護助手研修



チームを動かす看護師育成が急務

他業種に業務分担

入院医療の場において看護師が働くことの有用性が認められ、それを受けて看護師配置により診療報酬で手厚く算定されるようになった。平成18年5月、当病院も入院基本料7対1の届け出を行ったが、当然の結果として全国的な看護師不足が起り、入職者獲得に苦戦を強いられている。また、平均在院日数の短縮は看護師の業務量を増大させていった。病棟看護師の業務量調査によると、多忙な業務は所定労働時間内に終わらず看護師の労働環境を悪化させていた。そこで、他職種に業務分担することを検討した。始めに行ったのは、看護師の事務業務をクラーク

に移行したことだった。次に、看護師周辺業務を有資格者へ移行することを考えた。夜勤業務は看護師にとって負担が大きく離職の要因となっている。夜勤看護師の負担軽減対策については、①病棟採血業務を検査技師に移行する。②看護助手の夜勤を導入する。などのプロジェクトを検討した。特に夜勤明けの看護師は疲労がピークに達している上、早朝業務はナースコールが多く最も多忙を極める時間帯で安全性も低いと考えたからである。

臨床検査技師との第一回合同会議は平成21年4月に開催した。以後、会議を重ねるごとに検査部の賛同、協力を得られるようになった。その後、臨床検査技師の雇用と教育、



看護部長
松本久美子

松山病院 愛媛県松山市は人口約51万人で高齢化率は25.1%。文学の町ともいわれ、俳人の正岡子規を育んだ町であり、手記の「病床六尺」からは看護の本質を学びとることが出来る。当病院は同市西部地域にある急性期の一般病院で、平成4年に現在地に新築移転をした。その後、平成18年8月に南棟増築、平成20年4月からDCP対象病院、平成21年6月から増床により許可病床数141床から170床になった。また、平成22年8月から電子カルテを導入した。当病院は、小規模で職員の顔が見える、小粒ではあるがピリッと香る山椒のようなパワフルさが特徴である。



看護助手研修



採血チームの編成、看護師と臨床検査技師の採血業務手順の改訂などを行ってシステム化を図った。結果、平成23年8月には、病棟患者の採血のほとんどを臨床検査技師が実施するまでになった。当初は看護師の労働環境改善のための提案から始まったことだが、現在では臨床検査技師の業務拡大が図れ、お互いが協力し連携を強めチーム力を発揮している。

本来業務に集中、

モチベーションアップ

②の取り組みは、看護師と看護助手の業務連携の強化である。先に述べたが、急性期看護補助者加算によって看護助手を増員し易くなったことで人材を確保し、今年4月より看護助手の夜勤を導入した。夜勤業務のなかから看護師でなくてもよく看護助手で行える業務を洗い出し看護助手業務基準を改訂、看護助手の院内教育を開始すると共にホームヘルパー講座の受講を支援している。このように、多職種との業務分担を行ったことで、看護師が本来の業務に集中することが出来るようになりモチベーションアップに繋がった。また、当病院は、糖尿病、褥創対策、

肺炎予防、心臓リハビリ、NSTなどのチーム医療が活発に行われている。特に糖尿病チーム医療のフットケアチームでの看護師の活躍は目覚ましいものがある。看護師はチーム医療のキーパーソンと称されチームの要である。チームを動かす原動力のある看護師を育成することは看護管理者の責務である。

日本の医療は、これからも医療費削減政策が継続する。医療はサービス業と呼ばれて久しいが、労働集約的産業でもある。病院には多くの職員、専門職が働いている。良質な医療サービスを提供するには、優秀な人材を教育し、増やし投入することが重要である。そして、チーム医療の推進により個人の能力を最大限に活用しながら組織全体の力を向上させ労働生産性を高めることであると考えらる。

ポジティブに、柔軟に歩む

我国は総人口の減少、少子高齢化により、将来、医療や介護職の労働力不足を予測することが出来る。日本はその労働力を国外に依存して行く傾向にある。当病院も、今年11月からEPA看護師(経済連携看護師)を受け入れる準備を進めている。医療の激動期、看

護の過渡期に、将来を見据える目を養い、ポジティブに又、柔軟に、可能性を求めて歩み続けて行く姿勢こそが、新時代を切り開く手段だと思われる。